
魔王の弟様なう

水溜り ？

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王の弟様なう

【Nコード】

N9060P

【作者名】

水溜り？

【あらすじ】

私、真子^{まこ}は来週に迫るコスプレイベントに向けて徹夜で衣装を作っていたはずなのに、目が覚めたら男になって生まれておりました。しかもここは魔界で、私の兄は次期魔王で、美形が多くて魔法使いたり実際に勇者とかいたり王道ファンタジー世界だ、と？…冗談じゃない。元オタクで女の魔王の弟様が必死に異世界の壁をぶち壊そうと生きてく話。！注意！卑猥な発言や戦闘描写やグロテスクな表現が入り混じる可能性があります。

プロローグ、ある娘の夜（前書き）

この主人公は、精神は女です。そしてオタクです。でも体は男です。そのため、これってボーイズラブだろな感じですよ。よって、受け付けない！と思った方はすぐにでもほかをお探しください。それでもいいという方はどうかごゆっくり小説を読んでください。失礼しました。

プロローグ、ある娘の夜

「もーそれでさあ、聞いてよ！なんと今日は徹夜で済ませてしまおうと思うんだー！」

とつぷり暮れた夜の部屋で、女友達にテンション高めで電話する娘が真子だ。小さめの彼女の部屋には少年漫画やギャルゲーやらちよっと大声では言えない薄い本なんかが固まって置いてある。それ以外はかわいらしい、普通らしい女の子の部屋で、ベッドの横には白いテーブルの上にミシンと選びぬかれた布が丸まっておいてある。真子はベッドに胡坐をかき、雑誌を持った片手に視線を移したまま話す。

「んで来週までにコスプレ衣装完成させて初お披露目！」

「それ真子的に大丈夫なのか？」

「うん、あとくるみんのエプロン縫うだけだし、小物は明日作るし」

くるみんとは、真子が今愛でに愛でている胡桃沢くるみざわみなどとゆう美少女キャラである。キメ台詞に吐く「身の程を知らない！」がとてもきゅんきゅんなのだ。彼女は戦うメイドとして朝の七時から画面の中で活躍中している。ひらひらと輝くエプロンに魅了されるのは世の男たちだけではない。

「まじか。さてはお主、夏休みの宿題はこつこつと済ませて最後の週は遊びまわるタイプか！」

「いや普通に最後まで引きずって最終日に友達に見せてもらおう派ですが」

「なにそのコスプレに対する執念。ギザこわす」

「オタク魂ってやつさ」

はっはっはと笑って見せた真子に「出来たら写真取らせてね」いつもはクールな友達も声を弾ませて、楽しみに言うもので。雑誌の中のメイドたちを見ながら真子はニヤニヤがとまらない。

「任せとけ、じゃあまた明日」

「ばいばい」

切った電話をベッドに放ってそれでは仕事にとりかかる。ひだの多いこのエプロンは縫うのが一苦労なので真子の顔も真剣そのものだ。カチカチカチカチ。布を縫い付ける音と、カチカチ時計の時間を刻む音。部屋からその音しかない。

どれくらい時間だったろう。

ふと見ると、時計は七時を指していた。真子は出来上がったエプロンを満足げに眺めて、そして後ろのベッドに倒れ、ため息をついた。

目を瞑っておきたら、まずご飯を食べて、友人の家をたずねよう。
ああ楽しみ。楽しみだ。

真子はそのまま眠って、息苦しさに飛び起きた。
・・・はずだった。

「ぎゃああああん！ぎゃああああん！」

うわああああ！ここはどこおおお！！

間違ってもこんな叫び声で起きるつもりなんか、さらさらなかったんだ。

戦争も、滲めて薄めて、飲み干すの

あるところの世界の話。そこには豊かな魔力が満ちていて、勇者と魔王が存在している。

その昔、人間が生きるため土地を広げ、追い出された魔物たちが人間を襲い、怒った人間が魔法を使い魔物を殺し、そのものたちと仲のよかった魔族が巨大な山脈の向こうから人間の地へ襲い掛かりました。

そのときに活躍した人間側の英雄が、異世界からきたという男、後に勇者と呼ばれる者で、魔族側の英雄が、その時に一番多く魔力を身に宿した魔族の男、後に魔王と呼ばれる者でした。

人間も魔族も魔物も精霊もすべてすべて巻き込んで殺しあって肉と骨と血が地面をどこまでも覆うほどに戦いました。ただ相手进行を憎しみと耳をふさぐような嘆きだけが世界にありました。親兄弟を目の前で魔物に殺された子供が、魔法使いや戦士になって魔物を殺

すように。残虐に恋人を奪われた魔族の女が、自分の命を捨てるように戦場へ戦いに行くように。

終わらない戦いを終わらせるために、勇者と魔王は世界の決まりを作りました。魔界の領土はこっからこまで。じゃあ人間界はこっからこまでにしよう。そのほかの土地は野生の生き物や精霊のものにしよう。そしてもし自分たちの領土で問題が起こった場合、自分たちで解決しよう。

もし我等の領土に勝手に入って殺されても仕方がないと思え。

それから数百年。

ひとつの巨大な山脈が魔界と人間界を一刀両断しています。

向こう側などちつとも見えませんし、魔物にもよほど飢えていない限り襲われなくなりました。そうすると、戦争を知るものは死に、新しく生まれるものは忘れていくものですから、大きな戦争があったと書物に記されただけのカスが残るだけ。でも別に良いでしょう。ここでは恋人も兄弟も親も子も、奪われることはありません。ただ大小ある富の差だけが笑顔の数に影響します。

だから人間たちはこの山脈の向こうに魔物がいるんだろうなあと思いながらも日々を平和に暮らしていますし、魔物たちもこの山脈の向こうに人間がいるんだろうなあと思いながら魔王様から与えられる魔力で人間なんか食べなくても平和に暮らしています。

そしてまた数百年。

魔法の技術も進み、豊かになり、人の欲が大きくなり、平和だけでは物足りなくなり、誰かがささやきます。

毒を含んだいやらしい声で。

「魔族など所詮卑しい獣ではないか。われら人間様がなぜそれらにおびえるのだ。昔われらの祖先が受けた傷を思い出せ。われらはなぜこんなところで縮こまっていなければならないのだ？すばらしい魔法技術や機械を持つ、このわれらが！やつらが魔王などとゆうものを持っているのなら、また新しい勇者様を呼べばいいではないか！きっと神はわれらに勝利をもたらすであろう！」

あーあ。あーあーあーあーあー。

ばかな人間。

かわいいそうな人間。

魔界だって、同じように文明があり、魔法があり、豊かに栄え、しかし魔物は人とは違い欲望は種族同士で補っておりました。だって殺しても死なないのは、魔族や一部の魔物の特権ですから。

互いに散々殺しあって、次の夜に一緒に飲みに行くのは魔界では頻繁に見られる光景でした。

人間なんか、魔界に要らないのです。

もともと魔族は忠義に厚く、曲がったことも大嫌いです。

魔物たちの中には卑怯者と呼ばれるものもいるでしょうけど、さすがに卑怯です。

腐ったものではけてないのです。

本日も、魔界はどことなく薄暗い空をしています。

魔王様が光を苦手とする魔物たちのために暗雲を張っているのです。よう。

これでも十分晴天なのですから、魔物たちは気持ちよさそうにあくびをひとつ、ふたつ。

「今日も平和だなあ」

そうして、自主的に魔王様へ祈りをささげます。

実はこの行為で自然と魔王様の魔力は蓄えられていつています。

まさに民が魔界という国を支えているわけです。

素敵でしょう？

ここだって、恋人も兄弟も親も子も、奪われることなんてないんですから。ただ老いと膨大な時間があるだけ。

そうそう、魔王様には二人の子供がいらっしやいます。

一人は兄のシェリエル様と、弟のアルーギヌ様です。

シェリエル様はまるで昔の魔王様の生き写しのようにすばらしい魔力を持っていて、その美貌も年頃の娘には毒のような方だとささやかれています。この方もこの魔界を良くしたいと切に考えておられる。民の一員として、うれしい限りです。

アルーギヌ様は何でも病弱だとかでめったに国民の前には出ないのですが、出てきても確かに顔色が悪いので、本当なんでしょう。

弟様も魔力は大きく、純粹で、まだ十二だというのに、恐ろしいく

らいです。

その力を将来魔界に満たしてくれる日がくれば、安心なんです。

あ、早く仕事に取り掛からないと、妻がうるさくなってしまう。

顔は私と同じ不細工ですが、愛嬌はあるんです。やさしくて、最高の妻です。

、もちろんですよ。

大切にします。

しかし、私たちから聞いた昔話を絵本にしてみたいなんて、夢のある人なんですね。

もしそれが完成したら、読ませてくれませんか？

いや、長い時間生きているとこういうった新しいものに出会わなくなってくるものなんです。

だから最近退屈していて。昔の血と嘆きが懐かしい。

うそですよ。そのぐらいの冗談を言えるほど今は平和なんです。平和すぎるほど、平和なんです。

ええ、だから楽しみに待っています。
それでは。

ゴリラの頭をぐしゃりと上からつぶして青く塗ったような顔をして、ずんぐりと、そしてゴツゴツした肉体と、灰色と黒のまだらの翼を持つている巨大な怪物は、いろいろな道具が飛び出し、布を内側から押し広げている不恰好な焦げ茶色のリュックを背負っている男に顔を歪め目を細め、「気をつけて行ってらっしゃい」と言った。

どうやら微笑んでいるつもりのようなだ。

男も同じように口をへの字に曲げて、ぽいとかばんの中から自由帳のような紙の束を怪物に投げた。

そして、「礼です」とカラカラ笑うと、そのままどこかへ去っていった。

絵の具がにじんであるのが見える。

きれいな紙のなかの世界。

赤、青、黄色。

この三つの目とひとつ足の怪物は、いったいなんだろう。

この紙のどこをとっても此処ではない世界が、紙をめくっても、めくっても、まだ。

最後の紙。

怪物が書いてあった。

青い怪物。

無愛想に怖そうに、怒りそうに書かれているくせに、その厚くグロ
ーブのような手には、醜くて可愛い彼の最愛の女性が優しく支えら
れていた。

やさしげに、幸せに二人とも笑っていた。

呟く。「やはり、平和でいい。いや違う。平和がいい。わたしは、
わたしは、」

戦争も、滲めて薄めて、飲み干すの（後書き）

題名は喉元過ぎれば熱さ忘れるの意

ほとほと花が落ちて哀し（前書き）

視点がくるくる変わる。

ほとほと花が落ちて哀し

なんでなんでなんなのここからだがうまく動かないよ助けて誰かおとうさんおかあさんたすけておねがいたすけていやこわいたすけていやいやいやいやあ！！

水を飲み込んだような、いきなり頭を水面に突っ込まれたような衝撃で、私は叫んだ。

さっと体が柔らかいもので包まれて、体が浮ついている。

耳があまり聞こえない。

ぐらぐら視線がまわる。

何が起こってるのかわからないまま、私は甲高い声の中、必死に嫌、嫌と繰り返した。

だんだんぼんやりとした視界から周りがはつきりしてくる。

やわらかい布に包まれて、私は肌色の人影におびえていた。

息がこんがらがるような知らない言葉があちこちからこぼれている。頭痛い頭痛い。じんじんじん

何かが私からすべてを奪おうと頭を覗いている

私の大切なものに手をのばして、盗られたら、それを忘れてしまうのに、いや。

わすれたくない。私は私でしょ。誰なの私に入ってこないで！！

私の中でバチンと何かがはじけた。

そのとたん、なにかはため息をついて帰っていきました。
私は泣いている。

大きな声をあげて。

なのに、私の声が見つからない。

ぎゃあああん
ぎゃあああん

あかちゃんが、私と一緒に泣いているようだ。

なんだかわからないまま、私のまぶたは下がっていく。
あったかくて、なぜか安心できるぬくもりが傍にあったせいで、恐
怖の中、ゆっくりと私は眠りに抱き込まれていった。

現実逃避、逃避行。

誰も助けてくれないんだもん。

魔界の城の、一番高い塔の中、町を一面に見られる部屋の中。

そこは妖精のように美しい一人の女とさめざめと泣く使用人たちと、赤ん坊とやわらかいたくさんのシーツがありました。

ステンドグラスに色付けられた光が女にさらさらと降り注ぎ、その光景は一枚の絵にしても語ることはできないでしょう。

女は赤ん坊を産み、もうすぐ力尽きようとしていました。

魔力の高い男とその魔力に満たない女の間の子供を作ると、女の中で高い魔力が生まれ、腹の中で育つうちは徐々に体が慣れていくので大丈夫だが、産んだ瞬間赤ん坊は母親の魔力を無意識に奪っていつてしまう。

だから赤ん坊の父、男は女に子は作るなと言っていたのです。

「アルーギヌ、アルーギヌ。私の子、あの人の子。かわいいわ。ああ死んでしまっても、あなたを愛しているわ。いつだって、私は傍にいますから」

赤ん坊は泣きつかれてしまったらしい。

うふふと女は幸せに笑い、その口を静かにゆがませました。男を想って静かに泣きました。

許してね、ごめんなさいね。許してね。

私子供が欲しかったのよ。かわいい男の子が良かったのよ。

男には別の女の子がいました。

その女も死にましたが、子供はとても強い魔力を持ち、男の後を継ぐ予定なのです。

男がその子供にやさしげに微笑むのを見て、女はうらやましく思っていたのでした。

私の子供にも、そんな顔で微笑んでくれるのかしら。

私たちの子供は、とてもかわいいわ。

やさしげなぬくもりは冷たく冷えていく。

使用人は女の体を綺麗に清め、棺に納め、赤ん坊を取り上げた。母親に良く似た、金髪のかわいい男の子だ。

さあ、魔王様にこのことを伝えないと。

ほとほと花が落ちて哀し（後書き）

お母さんの出番はこれで終わり。
ここから本編らしい本編。

NONNONONO（前書き）

B L、オタク用語多用につき注意。

NONONO

女の子がベッドに寝転がっていました。

友達と電話して、エプロン縫って、たしか来週あたりが楽しみにしていたコスプレイベントの予定でした。

女の子は眠くなったから眠って、眠って、眠って、眠って。
幸せそうに眠って。

女の子の部屋のドアがずつと開きます。

影が、入ってきました。

男のようです。

右手には包丁をもっていて、女の子に振りかざして、そのまま、そのまゝ、あ

グ
サ
ツ

あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああ
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤赤
パジャマが赤く滲んで叫び声も赤が飲み込んで太陽に真つ黒に焼け
焦がされた、炭のような人影を睨みつけてぶるぶると唇を震わせて。
目は開いているのに。 あいつだと言いたいのに。

だけど何も出来ないで、何も出来ないまま、

ベッドの上の女の子は。

……あれ？

なんだ、ただの俺か。

「!!!!」

飛び起きる。まばたきで頬に涙がほろほろと流れていく。

深いため息を吐いて、またか、と落ち込み、少しほっとする。

いやな夢だ。いや、これは過去の記憶なのか。

だとすればどれが本物の記憶だろうと自傷的に笑う。

昨日は、鉄の杭が胸に突き刺さって死んだ。一昨日は自殺者みたいに俺はマンションの高い場所から飛び降りていった。その前はずっとずっと眠ったままになって病院で死んだ。あるときはなぜか犬に食われて。原因不明の病で。放火にあって。

いつも最後に俺の心臓が止まるバッドエンド。

痛みはいつもないけどそのたびに頭の全てで恐怖を感じてる。ほんとに胸が潰れそうになる。

”俺”は、死ねないけど。

”わたし”は、死んだんだろうか。

それとも、この体に執着させるために誰かが見させている類なのか。六年は長すぎて、友達の声も、自分の顔も思い出せないけど、ただ、わがままな一人娘の私を愛してくれたお父さんに、お母さんに会いたくて。

会いたくて。

でも、会いにいけなくて。

どっちが受けか攻めかでもめにもめたオタ友たち。

かわいい初●ミクちゃん。グミちゃん。俺の嫁たち。

スナック菓子。チョコ。

アニメ。漫画。素敵なサイトたち。コスプレイヤー様。

そして、

「俺のマイエンジェルくるみんなん！会いたいよおお！ガーターベルトと太ももと遠慮気味の胸が俺を呼んでる！！女だからこそ出来るコスだったのに！今は男の娘ハヤってるらしいから大丈夫ですかああ！エプロンは降ってきますかああ！」

なんて俺はいやな世界に来ちゃったんだろう！

アニメも漫画もエロゲーも素晴らしき電子機器もなくちゃどうやって生きていけばいいの！

まあ今生きてるんだけどね！魔法みたいななにそれおいしいものがあるから俺なんとかやっていきますただしハリー・ポッターみたいに万能じゃないですごめんなさいい！

馬鹿なの死ぬの？かわいいのセクシーなのどっちも好きです！

実はBLだって好きです！でも自分は巻き込まれたくないよおお！
お尻は守るためにあるのですか？神様！

それとももしかして6年はただの体感年数で実際には全部わたしの夢ですか！

夢オチエンドはねーわwwとかもう絶対に言いませんから！お願い
起こして！ほっぺひっぱたいでもいいです！ボッコボコでもいいです
！起こしてくださいそしてこれをネタに友達にあきれてもらうんです！
「わたし夢の中で魔界の王子様だった！」「厨二病乙ww」って、
ねえ、うん。

どんなに叫ぼうと神様とやらにはキコエナイってされてしまう。

うう、俺はおどろおどろしく暗闇を体から出すようにと唸り、指ど
おりの良い金髪の毛をくしゃくしゃと乱した。

等身の4倍ぐらいある大きさの生きた花と蔓が巻きついた鏡に、
布団から起き上がって全身を映してみる。

どこもかしこも細くて、白くて、思わず手を伸ばしその形の良い爪
先にキスをしたいくらい綺麗な体。着ている服だってどっかの虫だ
か動物だかの超高級そうなさらの布で、穢れのない純白なネ
グリジェみたいな寝巻きは汚れることもしわひとつもつかないし。
ふるふると揺れる赤い瞳は濡れた宝石のようだし。それを覆うまつ
げはばさばさで、マスカラなんか必要ないくらいだし。ちっちゃな
顔にバランスよく血色のいい唇やちょうどいい鼻や、少し前を向い
た耳がついていてもうこんな子がいたらぺろぺろしたいよなっ
てくらいだし。腰とか自分で言うのもあれだけどけっこうそるし。

王道の美少年。

しかも六歳。シヨタ。

次期魔王のこれまたカッコいいお兄ちゃん☆を持つ、魔界の王子様
アルーギヌ。

これが今の俺。

綺麗な顔が、盛大にゆがむ。

「きいもおおいしい！！俺きもいいい！おぼろろr！！」

ぎん！と鏡越しに自分の面の皮を恨めしく睨んだ。

「こんないやあああ男になったら俺、面は男前で銃もってダシヨ
ーンすんだって思ってたさーせん！！」

正直この姿で私なんて言う冗談じゃなく男装した姫って感じだったからやめた。

厨二臭はやめていただきたい。

嫌いじゃないが苦笑いがとまらなくなる。むしろ爆笑しすぎる。

体感時間九年前に俺は卒業したっつーに！

城のみんなが「アルー姫」とかきもい名前で俺を呼んでるのを聞いたときリアルにぞわっと鳥肌がたったね。

女の時も姫なんて柄じゃなかったし、イケメンとか遠くで眺めてなんぼですだったし、だから俺の言葉遣いが年々酷くなっていくんだよ。

これは女王様タイプでも、甘えた弟系でもおkって最初は自分でも

どきどきしてたけど猫かぶりを始終ずつととか無理。

疲れる。めんどくさい。

最初のころは面白がって「美しさは……罪……」とかやってたけど懲りたわ！

「……ほんと、世のイケメンを憎む野郎共に背中刺されそうでこわすぎるぜ。いや、刺される前に食われるか、これ。女であるはずの俺でも身震いが止まらない。……あたりまえか」

あのごみごみとした住宅街が懐かしい。

この世界はとても綺麗な空気だ。

排気ガスとか（笑）ってくらい。

ただ少し、薄暗くて、家の人が人間じゃない顔してて、ご飯がすごくおいしくて、アニメがなくて、漫画がなくて、テレビもラジオも電話もなくて、空にはすずめじゃなくドラゴンがゆうゆうと飛んだりしてて、確実に私の住んだところとは電子レベルで違うってことだ。

ありえない。

ありえない、と言い続けて、こんなに経ってしまった。

もうそろそろあっちの世界の哀愁に、慣れなきややってられない。

人間は忘却が得意だといえどしかし、嗜好品に溺れた快楽を忘れられない。

私の人間の部分がもう少しだけ、ってぐずってる限り俺はこの世界の人じゃないし、あっちの世界に帰れるわけじゃない。

そのとき、こっちには魔法とかあるんだから、それ使って帰れるんじゃない？って考えがビビッときて、漫画とか、アニメで使い古された絶対帰ってやるんだぞ、の台詞でお星様に誓ったのでした。まる。

ま、この世界の父親がまさか魔王だったとかほんとびっくりだよね
ー。

ははは。もうおどろかねえよ。

最初聞いたとき、このお兄さんまだ卒業できてないのかって哀れむ
ような目をしてしまった。

私の周りにもいたし。隊長とか。軍曹とか。
だけど本当だった。

お約束どおり兄様みたいなおっきい子供を持ってるように見えない
くらい若々しい。

ご兄弟ですか？レベル。

でもやっぱかなり生きてるみたい。

最近「もうおじいちゃんだから、そろそろしたら魔王はシェリエル
に譲るー」って言って部下の人(?)を困らせた。

しかも本気らしくて、兄様は今がんばって魔王になるために勉強し
てる。

いやー。こういうときって次男坊って楽。

兄様大変そうぷすす。

思い出し笑いで気分が良くなってきたところで、俺はザ・王子様な
フリフリの服に袖を通した。

まだ小さい手を眺める。

「さあて、さっさと着替えてご飯としよう。今日のメニューはなに
かなー！」

六年もたてば、人は慣れるものだから。

ネガティブにならないように、俺はいつものように笑って見せた。

鏡の中の少年も、同じようににぱーっと笑っていた。

今日の俺も、かわいいな。なーんて。

食堂、というか、漫画で見たことあるような縦長いテーブルに行く前に、あったかいおいしそうな匂いにつられて厨房に行く。

シンプルな白色の服を着た人じゃないものたちが、まじめにせっせと食事を作っていた。

妖怪百奇の挿絵に出てきそうな強面なのに、すごくやさしいのよ。このまえなんか俺に「このごろ気温の差が大きいので、風邪に気を付けてくださいね」って蜂蜜レモンみたいな味のホットドリンクくれたし！

その中で比較的人に近い姿をしたメイドが、スカイブルーのポニーテイルを揺らし、こちらを振り向いた。

なかなか美人だがやはり人と違い、その額と頭の間には二本の角と、笑った口元から覗く鋭い牙で、その女性が鬼に近いものであるとわかる。

見知った顔に、彼女はやわらかく微笑んだ。

「あらアルー様、本日はお早いお目覚めですね。おはようございます。ちょうど朝食の用意ができたところですよ」

「おはよう！良い匂いだねバレン」

「ええ、チイテップの果実とサロンの肉を使用したスープと、いくつかのパンに、ハジャデのジャムをご用意しました。」

そのほかにも果物やおかわりのパンなんかがある。とても豪華。これも魔界でいい作物ができるように父様たちががんばった結果なんだから、すごい。

荒れ果てた土地に魔力を注ぎ、雑草を生やし、土地を潤し、水を引いて、それからと時間も根気も魔力も十分にもぎ取られる作業だったそうだ。

ちなみに、チイテップの果実は梨とじゃがいもを足するような味で、見た目は小さな赤い実。サロンはうさぎの肉みたいに柔らかい感じの、見た目は完全に球根。目がいっぱいいて、蔦のような触手をもつ食人動物なのに、食べたらい外においしいってやつだ。ハジャデは桃みたいに甘い味。蜂蜜に近い色の中身で、外側の皮は真っ青の食べる気なくす外見をしている。

植物も食べられないように必死なんだなあ。

なににせよ、とってもおいしそうだ。

味はぼてととベーコンのスープだもん。

「では食の間へ行きましょう」

「はい」

数人の使用人を引き連れて、相変わらずガラーンとして寒そうなテ
ーブルの部屋についた。

だだっぴろい食堂で使用人にひかれたイスに座り、一人で心の中で
「いただきます」と言う。

この言葉は、この世界では自分の獲物を追い詰めて獲物に最期の希
望を失わせるときに使う言葉、っていう認識だったらしくて、最初
のときすごくテンパられたからいまでは使わないようにしている。

あースープうま。

パンうま。

「そういえば、兄様は？寝坊？」

お腹も膨れたところで、いつもならそろそろ来るはずの、「おはよ
う今日もかわいいねアルーほんとかわいいなんでお前こんなに可愛
いのはあはあはあ」 「兄様が腸ねじ切って自害してくれたら俺が幸
せ」 「誰だオレのアルーにこんな言葉教えた奴」 って勝手にキレて
るブラコン野郎がいない。

こんな口利けるのは、俺がまだ六歳なおかげですね。

「シェリエル様でしたら、まだ部屋でおやすみなのかもしれませ
んわ。昨晚も遅くまでお忙しそうでしたので、お付きの執事がささや
かですけどって言ってお夜食をお運びいたしてました」

そう言うのは、桃色の艶めいた髪をお持ちの、なんともこう色気
のあるメイドさん。胸は大きめだけど、なんか大人ではない感じのエ
ロさ。全体的にぽわっとしてて果実系のいいにおいがする。ただ、
魔族と悪魔系統のハーフらしいので、迂闊に近づくと後悔するらし
い。蛇のような執着愛なんだってさ。怖いね。でもすごく有能。

ささやかにその執事自体がお夜食ではないですよ？
あ、ごめんなさい。

食堂には俺と、料理人バレンと、メイドの桃色の人ことプリジア、
そしてクレッタというイケメン執事さんの三人。この人たちは、俺
専属のって形になってる。

プリジアの台詞に、俺はふーんと相槌をうった。

「そうなんだ。兄様大変だなー。でも、このごろの兄様と父様はな
んか変」

「変、と言われますと？」

今度はクレッタだ。少し首をかしげて、俺をあまり表情のない顔で
見る。

だるそうな目元と襟足にかかるくらいの深緑の髪ととんがった耳を
初めて見たときは、「受け！」と心の中で思いつき叫んでしまっ
た。

ちよっと前髪を後ろに流してるあたりぱいんだ。
眼鏡かけてないし。

「最近俺の部屋に疲れた顔してやってくるし、いっぱい抱きしめら
れるし、なでられるし。そんなに癒しを求めるほど何やってんの。
もしかして外交とかうまくいってないとか？」

「さあ、私どもは何も」

あいまいにクレッタが苦笑して首を振った。
じいっと三人を見るけど、帰ってくるのは何も心配なくていいん

ですよ的な微笑みだけ。
俺は子供じゃないから、大人の言うことは大体うそだってわかってる。

息をついて、兄様のところへ行っていない？と聞く。

常なら「シェリエル様のお仕事が済んでからです」って言われるはず

「ええ、なら私がご一緒しましょう」

「いえ、あたしがご一緒に」

「いえいえ、わたくしが」

「なんですか」

「なんなのよ」

「なにか問題が？」

「「は？」」

はい、なんかあったみたいですわね。

三人とも、その顔普通の六歳児なら見た瞬間泣いてるから早くしまいなさい。

NONNONNONO(後書き)

Q 平気？

A. いいえ、でも平気にならずにちや

Q 諦めたの？

A. いいえ、誰がそんなこと

Q ボクのこと好き？

A. いいえ、いいえ、いいえ、死んでも

(ふーん) 相槌を打った誰か。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9060p/>

魔王の弟様なう

2011年5月20日22時44分発行